

人影が見え始め、中年の夫婦にどちらえと声をかけられた。寄宿舎の二年生の救出を頼みに因島と答えると、自分等は八本松から一番列車で帰ってこない二年生の息子を尋ねて、海田市から歩いて来たとの事で、広島駅は駄目との事でした。息子さんの状況は寄宿舎に同級がいますからと言って、カンパンを戴き二号線を東に。途中九州から今治に帰省すると言う軍曹と一緒に、途中向灘駅で休憩したら、グラマンが飛来するも、もう逃げる気にもならない。夕暮れやつと汽車に乗り尾道へ。因島行きの船はもうなく、今治行きの最終便に乗る軍曹と別れる時の東の空は真っ赤で、福山市が燃えているとかでした。

海岸通りの岩崎旅館に着くと、さあ大変と病院に、しかし院長は広島

とかで、八十歳近い大先生に治療を受けるがその後の記憶は今は無。朝一番の便で港に着くと村の皆がジロジロと、今から思えば上半身右目が開いているだけで、包帯で真っ白の少年を見れば驚いたでしょう。

それから数日は四十度をこす高熱にうなされ、下痢の他は記憶はない。身重の母とすぐ上の姉が懸命の看護をしてくれて、記憶があるのが十三日頃、姉に火傷の治療を受けている時に、六年生の担任だった井上先生が見舞いに来てくれた。壮一郎君始めみんな帰って来たが駄目らしい、と母は話していました。

火傷にはビタミンを沢山取ればと、浄土寺の奥さんは、御盆にお供えのお下がりをどつさりと差し入れてくれ、ガーゼにキュウリの汁と卵白を交ぜて、白い粉と酢を交ぜたのを

火傷に良いと教えてくれました。最初はヒンヤリと気持ちが良いのですが、はがす時の痛さは今だに忘れられない。しかし、十数年は海水浴は出来ませんでしたがお陰で今はケロイドも皆さんと一緒に入浴しても言わないと分からない様に成りました。

しかし被爆者は今まで話してきた惨事の他に、放射線傷害がありました。小学校の同級で山陽中学の円光君は至近距離の八丁掘りの満員電車で被爆しましたが、回りの人のお陰で、ガラスの破片での傷程度でした。鉄工所経営の父親は彼が小学校低学年の時に中国で戦死しており、見舞いに来てくれた彼の祖母は、跡取り息子が戦死して神も仏も無いと思っ

ていましたが、孫は助かり学校が始まらないので、海水浴やら塩田の勤労奉仕をしていると母と話していまし